

## 私の農業

自給自足の生活の予定が酪農に ー穀物多給への疑問から放牧酪農へー

大学を卒業して（1991年）自給自足の生活を志して斜里町へ行く。計画通りにいかずに近くの酪農家に拾われる。それが酪農との縁の始まりで、今、足寄町で酪農をしている。しかし当時は酪農などのお金のかかる農業をしようなんて考えてもみなかった。

その後、夏は北海道の有機農場で働いて、冬場は内地へ出稼ぎという生活を4年間する。その中で旭川の山の中に戦後開拓で入植して、独自に山地酪農を発見した天才、斉藤晶さんと出会い師匠とする。

「人間の食べられない草を、人間が食べられる乳や肉にかえてくれるのが牛の一番の価値なのに、どうしてこんなに沢山穀物を牛にあたえるのだろうか？」と酪農場で働きながら思っていた。どこの酪農家の親方に聞いても穀物なしの酪農など無理だと言われた。

ニュージーランド酪農との出会い ー堆肥の上に牧草が生えているー

ニュージーランド（以下NZ）では穀物なしで酪農をやっていると、十勝の農家のNZ酪農の視察報告書を読んで知った。NZでは、穀物飼料無し・365日の放牧・季節繁殖（春にまとめて分娩させて、冬場はすべての牛が乾乳）をしているらしい。放牧草の栄養価が高いので、放牧をしていれば穀物飼料がいらならしい。

その視察ツアーの企画をされたサージ ミヤワキの社長の宮脇豊さんに、東京で出稼ぎをしている時に会っていただいた。視察報告書に資料として『ニュージーランド低コスト酪農』の和約が付いていた。その著者のお一人のコンサルタントのボーンさんを紹介していただいた。

NZではボーンさんが牧場を案内してくれた。スコップで草地を掘る（NZでは牧場見学をすると牧草地に穴を掘って土壌を見るんだとびっくりした）とミミズがうじゃうじゃいる。まるで堆肥の上に草が生えているようだ。この土の力が、穀物なしの酪農を可能にしているのだろう。そしてこの豊かな土を作り出しているのが、放牧による、牛・土（ミミズ）・草の循環である。

そのNZ訪問の時に、『低コスト酪農』の共同執筆者のドルトンさんが先生をしているワイカト職業大学を訪ねる。その場でワイカト職業大学の酪農学科の面接が始まって合格をする。半年NZで酪農の勉強をすることにする。牧場で働きながら学校へ通いたいと、学校の先生に紹介されたのは19歳の青年のアレン。彼は低オーダーシェアミルク（農場の経費の負担の割合に応じて、乳代の一定の割合を受け取る）で210頭搾乳の牧場を一人で任されている。彼の牧場でお手伝いをしながら、学校へ通う。アレンは人間的にも素晴らしく、彼との出会いのお陰で、一人で牧場を任されることを目標にして、4年間NZで暮らすことになった。アレンは私が何を言っても“Go for it.”と返事をしてくれた。

マイペース酪農交流会に励まされて新規就農

日本へ帰ってきた。新規就農をするために莫大な借金をすることに自信が持てないでいた。北海道の伊達市にあるビックリドンキーの牧場（アレフ牧場）でまず働いた。ビックリドンキーの社長の庄司さんが NZ の私の働く牧場を訪ねてくれて、大変お世話になった。

亡くなられた庄司社長は、食産業にたずさわり農業に関心が深く『はじめたくなる酪農の本』（株式会社アレフ）をご自身で出版されている。そのあとがきの中で、「自国の、小さな単位での資源の循環がこれからの世界の食と環境を守る要になっていきます。」「少頭数による放牧・循環型の酪農です。農業は単なる経済的生産の道具ではなく、自然と人、人と人をつないで生命と文化を育む崇高な役割を担うものです。志の高い酪農家、農業者の活躍に期待します。」と書かれている。

伊達のアレフ牧場でお世話になっていた共済の獣医さんが、新規就農なんて絶対に無理だとアドバイスしてくれた。彼は往診の時に酪農家を連れ歩いてくれた。牛舎につながればなしの牛たちは、足が腫れているし、農家の人はいかにも疲れた顔をしているし……。悪いことを言わないからやめろという獣医さんの親心だったのだろう。

就農をすることを後押ししてくれたのは、中標津で先に就農をしていた友人の尾崎が貸してくれた本である。尾崎は就農したときは、おんぼろの牛舎の片隅に暮らしていたが、3年で家を新築した新規就農者の中で伝説になっていた。その本というのは浜中町で新規就農をされた海野さんがまとめてくれた立派な分厚い本で、農家の体験談と発言を集めた本だ。確か『北の大地の牛飼い』という題名だった。

規模拡大をして、一頭当たりの乳量を追求して朝から晩まで仕事を頑張っても、毎年赤字で経営が立ちいかなくなった数軒の農家のお話その中であつた。その方々がマイペース酪農（別海町の酪農家のグループ）に出会って、まず牛の頭数を減らして、放牧を始めて、濃厚飼料を減らして一頭当たりの乳量を減らす。そして、牛たちが健康を取り戻すと、追い詰められていた経営が改善される。牛を牛らしく飼ったら、人間も人間らしい生活ができるようになった体験談である。毎月の集まりでは「牛が減ってよかったね」というのが決まり文句であつた。それを読んで「これで出来るなら自分もやれるかもしれない」と新規就農に踏み切った。

耕作放棄地を借りて 30 頭の離乳子牛を飼い始める　－ 自営業は儲かるなあ－

足寄町放牧酪農研究会の佐藤会長と NZ でお会いしたご縁で、2000 年 6 月 1 日に足寄町に移住をした。戦後開拓でご苦労をされた木下利夫・千春ご夫妻のお子さんたちが後を継がないので、牧場を売ってもいいと言ってくれた。

足寄町に移住をするとまず町から通って、木下牧場の中の耕作放棄地のバラ線を撤去して、柵を張って、水を飲めるようにポリパイプをはわせて、離乳子牛を 30 頭買って放牧を始めた。

育成牛の資産価値は一か月で約 1 万円上がる。30 頭飼っていれば、夏の間は耕作放棄地

に放しているだけで、計 30 万円の資産増加だ。自営業は儲かるものだ、今まで人に使われていた私は目から鱗が落ちた。

足寄町で 29 年振りの酪農の新規就農と言われた。「絶対に成功しろ。お前が失敗したらそのあとが続かない」とはっぱをかけられた。

当時、3 年前に結成されたばかりの足寄町放牧研究会の活動が活発であった。毎月会員の 7 戸の農場のご夫婦が集まってにぎやかな勉強会を開いていた。その仲間に入れて頂いて、本当にお世話になった。

北海道でも放牧酪農は 1 割に満たない ー貴重な放牧酪農を広めるお手伝いをお願い致しますー

30 頭の子牛達が成長をして、2002 年の 2 月 12 日に最初の牛が無事に子牛を生んで、いよいよ酪農家の仲間入りをした。放牧酪農を自分自身で経営をしてみると、なんでみんなこんなに儲かることをしないのか不思議になった。一頭当たりの乳量を追求しなくても、沢山牛を飼わなくても、放牧をしていれば、牛も健康だし、ひとも豊かに生活ができるし、自然にも優しいし、穀物飼料も最小限でよい。いいことづくめである。

一人でも多くの酪農家に放牧がすごく儲かることを知ってもらいたい、そして放牧をやって欲しいと酪農雑誌に記事を書いたり、発言をしたりした。そこで学んだのは、酪農業界の方々誰も聞く耳をもたないということである。

誰も聞く耳を持たないが、放牧を取り入れれば日本の酪農の未来は明るい。放牧は日本の酪農の救世主であり、環境への負荷を最小限にする切り札でもある。ここにお集まりの皆さん、日本の酪農産業がつぶれる前に、一日でも早く切り札を切れるようにご協力をお願いします。「放牧の牛乳が飲みたい」とあちこちで発言してください。

今の補助金で成り立っている酪農がつぶれるのは日本が財政破綻をして補助金がなくなるときである。

農地が狭ければ狭いほど放牧のメリットがある ー補助金は農地の集団化のためにー

指摘しておきたいのは、「日本は農地が狭いので放牧が出来ない」というよく聞く誤解である。日本のように土地が狭ければ狭いほど放牧の恩恵が受けられる。放牧によって機械・施設への投資を最小限にできるからである。本州のような土地の狭い酪農家ほど、放牧のメリットを享受して欲しい。放牧のために必要なのは、広さではなく、土地のまとまりである。大規模化を推進するために使っている莫大な補助金を、飛び地を交換分合してひとまとまりにするために使うことが営農の効率を良くして、日本の農業を強くする。酪農は特に、草を運び、ふん尿を運ぶ、運搬業と言われているくらいなので効果が大きい。

もう一つの誤解 ー放牧は難しいー

これは、日本のコンサルタントや普及所の人々の口癖である。放牧草にはどのような栄養成

分があるかわからないこと、季節によって変わることを、牛がどれだけ食べたかわからないこと、を指摘する。彼らは1頭当たりの乳量を追求するのではなく、農場の最大利益を追求して欲しい。

ありがとう牧場は「誰にでもできる酪農」を目標にしている。要するにそれは放牧のことである。放牧によって1年に1頭あたり1万キロを搾ろうと思ったら難しいのかもしれない。私の牧場では、5000キロであるので、そんな放牧は何も難しいことはない。

牛と草地ミミズの輸入は二つで一つ — 牧畜民族の常識・ロックハートさんの教え —

NZのコンサルタントのボーンさんは南アフリカのミミズが一番優秀であると言っていた。NZはもともと森林で草地ミミズがいなかったことから、草地ミミズを輸入した。オーストラリアもミミズを外国から入れている。牧畜民族の知恵である。日本は牧草の種と牛は輸入をしたが、ミミズにまで頭が回らなかった。日本の牧場を見学する時には牧草地を掘ってみるが、ほとんどミミズを見ることがない。日本では堆肥の中に沢山ミミズがいるがそれは草地ミミズとはちがった品種である。

1964年に北海道知事の町村金五氏に招かれて、NZの草地学者のロックハート氏が北海道で1年と2か月間指導をした。「ミミズの速やかな分布拡大が北海道における牧草地の開発に決定的な重要性がある」と報告している。彼は北海道の草地農業を良くするために、情熱を注いだ。「北海道は本当にやる気があるのだろうか」と情熱をかければかけるほど、憤りも感じていたようだ。北海道はロックハート氏の言うことを聞かずに、NZ型の草地農業ではなく、輸入穀物を多給して畜舎で牛を飼い、一頭当たりの乳量を追求するアメリカ型の酪農を選択してしまいます。

補助金は小規模化に対してこそ出す — 人口密度の高い日本の農業は最小適正規模で農村人口を増やすこと。スイス型の農業 —

補助金の話しをしたので、ここで補助金の提案をしたい。

大規模化を推進するための補助金を、ある酪農家が「クラスター爆弾」と呼んでいた。大規模化によって地域社会が破壊させられてしまうことを指して言う。

私の住む植坂集落でも、離農をする農家がノベルズという、隣の町の大規模農場に土地を売って離農をした。土地の価格の相場が単当たり7万5千であるが、ノベルズは10万円を出したという話である。

現在は土地を買うと10年据え置き、その間のリース料の3%は補助金で出してもらえる。大規模化を目指す農家にとって、土地はただみたいなものである。足寄町でも、離農する土地は大規模化を目指す酪農家を買ってしまう危険がある。離農する本人が、安くても新規就農に売るという強い意志がなければ無理である。このようにして農村人口は減ってってしまうのである。

小さな農家が沢山ある農村と、大きな農場が少しある農村を思い描いてもらえればわか

る。日本のように人口密度の高い国がなぜ規模拡大をして農村人口を都会に流出させなければならぬのだろうか？30人も40人も従業員がいるノベルズが私の集落にもあるが、場長さんや従業員さんがどこから通ってきているのかさえ知らない。地元の学校（芽登小学校）のPTAもないので、場長さん以外の方の顔も知らない。

日本の酪農の大規模化に対する補助金が危険なのは、補助金が出るので、経営の中身もないのに、大規模化をして砂上の楼閣を築いていることだ。大規模化がそんなに儲かるのなら、自分で資本を蓄積して自己投資で大規模化するべきである。

もう一つの危うさは後継者にとって大規模農業が魅力的かどうかということだ。大規模化した本人が優秀であったとしても、大規模牧場を運営できる優秀な後継者をどこから探してくるのだろうか？

牛の頭数を減らすための補助金を -1頭減らしたら補を償する・1頭当たりの年間乳量を減らしたらそれを補償する-

穀物飼料を指導されたとおりに、1日10キロも与えると、農場の面積当たりの頭数が過剰になる。または大規模化に草地面積が伴っていない場合は、エネルギー単価が安い穀物飼料を多く与える。そうするとふん尿が畑地に還る量を上回ってしまう。そこで国はバイオガス発電所を作るのに何億円もの補助金を出す。今の流れはバイオガス発電所を作れば環境問題は解決するみたいな雰囲気になっている。そんなのに補助金を出すなら、面積当たりに適正な頭数にまで減らすことに補助金を出せば、バイオガス発電所など必要なくなるのである。牛の頭数を減らして、牛を健康に飼えば、農家の経営も良くなるのである。または穀物飼料を減らすために、1頭当たりの年間乳量を減らしたら、それを補償する補助金を出す。

バイオガス発電は効率が悪い。発生したメタンガスを燃やして発電をするためのエネルギーロスが大きい。適正頭数にして、ふん尿を直接畑に還すのが一番効率が良い。

もう一つの問題は、バイオガス発電所の運営が地球温暖化ガスを増やすことである。バイオガス発電所と農場の間をふん尿を運ぶときの車両の排気ガスがでる。発電所と農場の距離が3キロか4キロ以上になると、かえって地球温暖化ガスの排出量が多くなる。

補助金は諸刃の剣である

NZでは1984年の行政改革で、農業に対する補助金がなくなった。1994年から97年にNZにいた時に、NZの酪農家に補助金についてどう思うかあちこちで尋ねた。すべての酪農家が「補助金のあった昔に戻りたくない」と答えた。補助金がなくなってから、NZの生乳生産量は伸び始めた。現在は酪農産業が外貨を稼いで、他産業を補助している。

なぜ補助金がない方が良いのかと聞くと、「補助金で市場がゆがめられる。例えば土地や牛の値段が高くなる」「補助金なくなって経営の効率化の努力をして、昔よりも仕事に余裕ができた。昔は夫婦で働いていたので、2人で旅行などに出歩くことが難しかったが、経営を効率化したおかげで、2人で出かけられるようになった。」「一番の問題は、経営の上手

な農家ではなくて、役場に行って補助金をもらうのが上手な押しの強い農家だけが生き残ってしまう」「農業への補助金がなくなった時は、公務員を含めてすべての人がお金を働くとされたので公平感があったので、みんなで頑張れた」と答えてくれた。

NZの大規模化の理由は優秀な農場マネージャーを見つけるのが大変であるから -NZでは農場主と農場労働者が分かれて存在している-

NZの酪農家へのインタビューを続けて、なぜ大規模化をするのかを尋ねた。「優秀な農場マネージャーを見つけるのが、一番難しい。200頭の牧場を5つ持っている、5人の優秀なマネージャーを探さなければならない。1000頭の牧場だったら、1人だけ探せばよいからだ」という意外な答えが返ってきた。

その答えの理由は、NZでは農場主（資本家）と労働者がしっかり分かれているからだ。農場主でかつ農場現場で働いている人は少ない。優秀なマネージャーは少ないかもしれないが、豊富な酪農労働人材があるので、必要であれば新聞に広告を出せばすぐに見つかる環境にある。私たちの日本の酪農産業は酪農労働者がいないので、新聞に広告を出しても誰も来ない。一方日本では、酪農家の奥さんが怪我や病気をすると営農ができなくなって離農してしまうのが日本の酪農の労働現状である（旦那が仕事ができなくなっても奥さんが頑張っている話は聞く）。日本では資本家（農場主）が労働者を兼ねている。大規模化によって、仕事が増えて大変になるのは農場主自身であるので、日本の酪農家自身にとって大規模化のメリットはNZよりも少ない。

放牧を広げるためには消費者に応援してもらうことが近道 -本間幸雄がやってくる-

酪農業界の中で放牧をみんなしようよと訴えても、日本の酪農は変わらないことが分かった。遠回りのようでも消費者の一人一人に日本の酪農の現状を知ってもらうことが、日本に放牧を広げる唯一の方法ではないか。そんなことを考えている時に（2009年）共働学舎で働いていたチーズ職人の本間幸雄君がある朝、鍋とカセットコンロをもってチーズ作りにやってきた。

本間は酪農の現場も学びたいと1年間「ありがとう牧場」で働いて、共働学舎へ帰って今度は協働学舎の牧場部門で2年間働いて、共働学舎が放牧を本格的に始められるように努力をした。

そして本間と2013年に「ありがとう牧場しあわせチーズ工房」を建設して、乳製品の製造を始めた。

チーズ工房を建設した理由は、1. 一人一人の消費者に酪農の現状と放牧酪農・牛乳の良さを知ってもらうこと。消費者の方々が放牧牛乳を飲みたいと言ってくれば、日本の酪農は変わる。

2. 戦後の開拓で37戸だった植坂集落は、現在5戸1法人になっている。地方の疲弊を絵にかいたようなところである。大半は東京オリンピックの前後に離農をしたそうだ。チー

ズ工房を農村の中に作って、チーズ職人の家族に農村に住んでもらうことによって、農村の人口を増やしたいと思ったことだ。

3. チーズ作りは農村の文化（誇り）造りである。生産生産で魅力のない農村になってしまった。スイスを 2017 年に初めて訪ねると、「グリュイエールチーズ スイスの誇り」というポスターが貼られていた。まずは子供たちが住みたくなるような魅力的な農村にしたい。

放牧牛乳の素晴らしいを学ぶ ―放牧牛乳は奇跡の食品である―

本間が「ありがとう牧場」を訪ねて来た理由は、新得町の共働学舎でチーズを作っても、チーズがどうしても自分の作りたい味にならない。フランス人のチーズのコンサルタントが共働学舎に来た時に尋ねると「それは牛乳が違うから。フランスのチーズは放牧牛乳からつくられている」と言われた。七飯町のチーズ職人の山田さんからは「ヨーロッパで放牧がなくならないのは、おいしいチーズが食べたいからだ」と伺ったことがある。

本間に「ありがとう牧場」の生乳を提供する中で、放牧の牛乳と穀物で搾った牛乳とは同じ白いだけで別物だということを知った。十勝のチーズを食べ比べる会に出たが、本間の作ったチーズはすぐにわかった。

放牧の牛乳は美味しいだけでなく、健康にも良い。穀物で搾った牛乳の脂肪は飽和脂肪酸であり、放牧草で搾った牛乳の脂肪は不飽和脂肪酸である。

私が何よりも消費者の方に乳製品を通してお贈りしたいのは、牛たちの野生の力であり、自然の調和である。科学的には証明してはいないが、放牧牛乳の中にはそれらが詰まっていると信じている。放牧牛乳は一般の牛乳と混ぜられてしまうけれども、ホメオパシー効果で何万倍に薄まれば薄まるほどパワフルな力となっていると信じている。消費者の方々の元気に量は無限小だが、私の牛乳が貢献していると思っている。

放牧酪農・放牧乳製品に光を当てる ―牛乳の表示を義務付ける―

このように素晴らしい放牧酪農であり、放牧牛乳であるが、一番の障壁は、消費者の方が北海道ではすべての酪農家が放牧をしていると思いきまされていることである。放牧牛乳ですと言っても「北海道ではみんな放牧をしているでしょ」で終わってしまう。消費者が放牧の牛乳か舎飼いの牛乳かをスーパーマーケットで選択できるようにする牛乳の表示義務を定めるべきである。それまでは北海道の酪農の現状を知っている私たちが地道に消費者に伝えていかなければならない。光を当てなければ、存在しないのと同じである。

足寄町放牧酪農研究会の成功 ―新規就農希望者・若い酪農ヘルパーが集まってくる―

足寄町には 1996 年（平成 8 年）戦後開拓地の酪農家 7 戸が集まって足寄町放牧酪農研究会が発足した。普及所などの関係機関の反対による生みの苦しみのドラマは参考文献に上げた荒木和秋先生のデーリィマン連載に詳しい。

足寄放牧研究会は短期間に劇的な経営改善の成果を出し、ゆとりのある生活（研究会の別名を「夫婦でNZへ行こう会」）も手に入れた。その成功を受けて、2004年3月、足寄町議会が「放牧酪農推進の町」を宣言した。

放牧酪農は地域社会を活性化する

他町村で放牧をして新規就農をしたいという「そんな儲からない酪農はだめだ」と門前払いをされる。そんなこともあり、放牧でも新規就農ができる町ということで、現在まで、放牧酪農を志した15組の新規就農者が足寄町に根付いた。それは、放牧なので過大の投資の必要がない、小さな子供がいて夫人が子育てで仕事が出来なくても一人で何とかなる放牧の省力性、頭数が少なくても儲かって借金を返せるという経済効率性が高いからである。

芽登小学校は私の長男が入学した10年前には、7人の生徒しかいなかったが、今は後継者の就農もあり・新規就農者の子供たちと合わせて21人に増加した。これは放牧酪農によって規模が小さくても成り立つので、農家戸数が維持できるからである。隣の上士幌町では、町の方針でもあるから必ずしも児童数の減少ではないだろうが、芽登小学校の隣にある北門小学校は2年前に90年の歴史をもって閉校になった。

「これからの日本における農村社会の維持は新規参入者をどれだけ受け入れるかにかかっている。（中略）放牧酪農は新規参入者の有効な営農手段であるため、（中略）放牧酪農を推進しなければ農村社会は衰退するという時代が訪れていることを日本社会は認識しなければならない。」『放牧酪農の展開を求めて』荒木 pp246

足寄やまなみチーズ街道 ー農村の文化づくり、魅力的な農村づくりー

新規就農者の中には、チーズ作りを目指す者、カフェをやりたい者などの変わり者がいる。本間が成果を早速に出して、2016年に「しあわせチーズ工房」として独立をした。この成功をきっかけに、本間に続くチーズ職人が足寄にやってくることを期待している。美味しい放牧牛乳が手に入る足寄町はチーズ職人にとって、とても魅力的だ。

足寄町へ行けば美味しいチーズが食べられる、チーズ工房を巡って、美しい放牧の景観も楽しめる。そんな農村を心に描いている。現在「JAあしよろチーズ工房」、「しあわせチーズ工房」、「ありがとう牧場チーズ工房」の3つを結んで「足寄やまなみチーズ街道」と勝手に呼んでいる。

開拓魂 ー開拓者の誇りのバトンを次の世代に引き継ぐー

足寄開拓農協の30周年記念誌である『硬骨の賦』の「発刊にあたって」において当時の組合長の遠山氏が「ただ、聊か（いささか）心懸かりになることは、建設の途を急がなければならなかったあまり、精神材、即ち文化の蓄積に力及ばなかったことである。これからは、荒々しい開拓はなくなって内的建設の期に入るのであるから、文化の焰（ほむ

ら)をより高く掲げてほしいものである。記念誌はその申し送り書でもある。」と締めくくっている。私たち農民はいつまで建設の途を急がなければならないのであろうか？お国の言うことを聞いて終わりなき規模拡大をするのか、われわれ農民の先輩の戦後開拓一代目のころさしをしっかりと受けとめるのか、私たち次第である。

足寄開拓農協は2005年にJAあしよろと合併をして解散をしてしまったが、今年は令和の始まりの年である、これからはこころの開拓、文化の蓄積である。文化とは平たく言えば「お国自慢」である。若者も年寄りも暮らしたくなる魅力的な農村づくり。遠山氏は同じ「発刊にあたって」の中で「わが組合が“開拓”の二字を残すのは、果てなき夢を持ち続け、その夢を達成する意志を持っているからである」と書いている。

マイペース酪農交流会が日本の酪農を変える ―農民の主体性の回復の取り組み―

放牧の普及を消費者だよりにしては申し訳ない。農民の主体性の回復が放牧への転換を促している。

『放牧酪農の展開を求めて』pp274 荒木の文章を略して紹介する。「文化は経済的ゆとり、生活のゆとり、精神的なゆとり、そして人々の触れ合いの中から生まれる。

お互いの交流の場を設け、自らの生き方を語り合う集まりが生まれてきている。その代表的な集まりが根室地方で開催されているマイペース酪農と称される農民の主体性の回復の取り組みである。」

北海道の乳生産量が減る理由 ―生産量が目標となり、農家の利益が無視されている―

3年前の話になるが、農業コンサルタントをしているニュージーランド(NZ)人のキースが、NZに酪農の視察に来たホクレンの職員に「NZの酪農から何か学ぶことがあるか」とたずねたところ、ホクレンの職員の方は「何もないと」答えたと教えてくれた。

現在の北海道は各農協単位で乳量の割り当てがある。それは前年比103%の増産である。前年の実績が割り当て量になるため、各農協は最低でも乳量を前年と同じにしないと、割り当て乳量が年々減っていつてしまう。それが各農協にとって農家の経営を良くすることが目標にならず、乳量の確保が目的になってしまう原因である。

103%の増産のためには配合飼料をよりたくさん与えるか、増頭する以外に指導することは許されない。農家の経営を改善するために、頭数を減らして放牧酪農に転換するなど、乳量を減らすリスクのある指導などはできない。ホクレンの職員がNZからは学ぶことは何もないと言ったのは、とても正直な発言であったのである。

しかし、北海道、日本の乳量を増産する一番の方法は、酪農家が儲かることである。日本の乳生産量が減ってきた原因が、後継者がいないための離農であることを考えると、後継者から見て魅力的な酪農を目指すべきである。儲かる・ゆとりのある生活、若者が暮らしたくなる農村を築くことである。そして酪農業界、関係機関の第一の目標を農家の利益の向上にすることである。個々の農家が儲かれば、国全体の乳量が増えることは、酪農家の利益を最

優先にしているNZの酪農業界が証明している。NZ人に利益よりも生産量を目標にしていますなどと言ったら、信じてもらえないか、気が違ってしまったのかと思われる。

NZへ視察に来る農業関係者は、NZの一頭当たりの平均乳量を聞いただけで、「日本の牛の半分以下だ」とNZから学ぶことをしない。木を見て森を見ずである。その結果が1994年には日本とNZは同じ乳生産量であったのが、今はNZが2.1倍に乳量を増やし、日本は生産量を減らしている。その現実を目を向けるべきだ。

牛乳を出荷し始めた2002年だと思う。普及所員の勉強会へ出席した。当時乳価は77円/kgであった。これからは、60円に下がる。これからの乳価の下落を乗り切るには、フリーストール。TMR (Total Mixed Ration) (草と穀物を混ぜて牛に与えることで、胃の中の発行が安定をして、より多くの穀物を与えることができる)しかない。家族2世代で営農をして、1頭1万キロ、(確か)120頭搾乳、年間出荷乳量が120万トンにしなければならない。頭数が多くても、フリーストール、パーラーにすれば、つなぎ飼いの時よりも仕事は楽になるという話であった。

この講演の3年後の2005年に75円まで下がって、後は上がり続けて現在101円にまでなっている。乳価が上がったのは酪農家が国の言ったとおりの規模拡大・1頭当たりの乳量を増やす努力をして逆に経営が苦しくなったからである。おなじ過ちをいつまで続けるのだろうか？終わりなき規模拡大は今日も続いている。

NZでは100%すべての酪農家が放牧をしているのは、乳価が安いので放牧以外の方法では経営が成り立たないからだ。

日本の酪農産業構造 ーなぜ日本は酪農家の利益が優先されないのか？ー

その答えは、酪農産業の構造にある。NZでは乳業会社を酪農家が所有して、資材会社を民間が所有している。そのために乳業会社は酪農家の利益を最大限にするために努力をし、資材会社には競争させて農家の資材購入費を最小限にする。NZの乳業工場は農家の季節繁殖を可能にするために、冬の間工場を閉鎖する。こんな施設投資の無駄を日本の乳業会社はしないだろう。

日本ではこのNZの産業構造が全く逆立ちしている。乳業会社は民間が所有して、農協は資材を売っている。日本では乳業会社はできるだけ生乳を安く買おうとする。農協は資材を高く売って儲けようとする。そして日本の乳業会社は配合飼料の会社も兼ねているので、牛乳を買って儲けて、配合飼料を売って儲けているので、配合飼料を売れば売るほど牛乳の生産も増えて儲かる仕組みになっている。

農協・ホクレンの場合は牛乳を出荷額(2.5%)と、配合の販売額(5%)の両方でペーパーマージンが入る。酪農家が沢山配合飼料を使って、沢山牛乳を搾ってもらえらうほど莫大なペーパーマージンが入る。酪農家の利益とは関係なしに農協が儲かる仕組みになっている。かつて濃厚飼料の値段が円安で高騰して酪農家が苦しんだときに、農協の儲けが最大になった。

1960年代から、1970年代にかけて日本は、アメリカの余剰穀物の処理のために、穀物多給、舎飼いの酪農をアメリカに教えられた。濃厚飼料の輸入量は1960年の548万トン、65年の807万トン、70年の1520万トンと10年で2.8倍になった。

このアメリカに教えられた酪農の方法が、農協に莫大な利益をもたらすことに当時の農協関係者は気が付いてビックリしたことだと思う。これを知ってしまうと、放牧への後戻りは極めて難しい。

足寄開拓農協が放牧酪農を受け入れられたのは、研究会が発足する前に一度、農家の負債のために破たんをした経験があるからだ。農家が儲からなければ、農協はつぶれる。

経営の悪い酪農家ほど規模拡大の意向が強い — 計器無しの飛行機の操縦 —

普及所を数年前に退職した元所長さんと話す機会があった。彼はアメリカに視察に連れていかれて、そこで大規模フリーストール・穀物多給（TMR 穀物と牧草を混合して給餌する方法。穀物だけを多量に与えると胃袋の中で異常発酵が起こり牛が病気になるので、あらかじめ穀物と草を混合してから給餌する）・1頭当たりの乳量を追求する酪農を見せられて、これからの酪農はこれしか生き延びる道がないのだと指導された。「その当時は、これしかないとすっかり信じて頑張ったんだよなあ」と言っていた。その当時、農業経営学者の中に警鐘を鳴らした人はいたのだろうか？経営コンサルタントの須藤純一先生や荒木和秋先生などの農業経済学者、経営学者の発言に耳を傾けるべきである。

酪農家が賢ければいいだけの話だが、普及所の方々が騙されてしまったのだから、酪農家にもっと賢くなれというのは酷である。酪農家の大きな問題は、周りの酪農家の経営を全く知らないことである。計器無しに飛行機を操縦しているのと同じである。酪農学園大学の先生がまとめた『未来をはぐくむ清水町農業の躍進』では、儲けの少ない農家ほど規模拡大の意向が強いことに危惧を述べていた。

規模拡大・規模拡大と補助金で誘導される酪農行政の現状では、自分の経営は他の農場と比べて効率が悪いので、牛の頭数を減らした方が経営が改善するのではないかと考えるのは難しい。経営の悪いのは規模が小さいから、1頭当たりの乳量が少ないからであると考えてしまうのだろう。

酪農家全員ではないが、お国の言うことをそのまま信じて営農をしている人もいるのだとビックリしたことがある。新規就農をしたばかりの時に、家畜排せつ物法が施行されることの説明会に参加した。その時にある酪農家が「国の言う通りに、今まで、規模拡大・規模拡大で頑張って来たのに、こんな法律を作られたら、もう酪農はやっていけない」と発言をしていた。

ホルスタイン純血主義 — 儲からない酪農を農家に押し付けている酪農の象徴 —

今の日本のホルスタインの品種改良は、日本の農業の目的は農家の利益ではなく、生産量であることの象徴だ。日本のホルスタイン種の改良を見ていると、牛を豚化（豚さんすみません）しているようにしか見えない。つまり穀物を限界まで与えての死なない牛の改良をし

ている。草を食べる反芻動物を、穀物を食べる動物に改良しようというのか？

そもそも日本で北海道から沖縄までホルスタインの純血種を飼う必要はあるのだろうか？イスラエルではゼブーなどの、熱帯の牛の品種とホルスタインを交雑して改良をしていると酪農雑誌で読んだことがある。なぜ本州は本州にあった暑さに強い牛を品種改良しないのだろうか？

日本の経産牛の初回受胎率は約 31%、NZ は 70% に近い。2010 年からようやく NZ の種オスの精液が日本に輸入できるようになった。しかし、5 代前までホルスタインの純血の証明がないと輸入できないそうだ。その制約で NZ の種オスランキング上位の種オスの精液は輸入できない。これでは最初から NZ と競争することすらできない。

NZ で 20 年前から進んでいるのは、雑種強勢の利用である。日本の酪農家はホルスタインの純血を守るために酪農をしているわけではない。雑種強勢を利用して農家の利益を最大化するべきである。

私の牧場ではホルスタインとブラウンスイスの交雑をしている。雑種の一代目は体格が良く、繁殖、乳量、健康共に優秀である。NZ ではホルとジャージーを交互にかけあわせていくのが一番良いとされている。NZ ではホルとジャージーの交雑種の種オスは、キーウィブルと呼ばれている。日本の酪農家が雑種強勢を利用すれば、5 年くらいで利益が向上するだろう。

私たち酪農家のこころの豊かさ —この自然と同じだけの豊かな心をもって自然と向かい合うこと—

山の中で放牧酪農をしていると、「地球は天国だなあ」と思う。地球を天国と呼ばなかったら、どこを天国と呼べばよいのだろうか？草しか育たない厳しい自然条件の土地でも牛を山に放していると、豊かに家族が暮らしていける。牛たちは自分たちの食糧の上を歩き回っている。空気がただであって、水があって、石油でさえ湧き出ているのが地球である。

「乳と蜜の流るる里」という言葉があるが、蜜とは「クローバ」の花からの蜜なのだそうだ。「アラブには石油がある、NZ には白クローバがある」NZ の酪農家の言葉である。白クローバのお陰で、大気中の窒素を永遠に大地に取り込んで、牛たちが草を食べ糞尿を土地に還して年々土壌が豊かになっていく。大地が豊かになっていくだけではなく、人間にまで自然は乳と蜜の分け前を与えてくれるのだ。

アラブの石油は有限だけど、白クローバのある放牧酪農は永遠だ。こんな天国が地獄になってしまうのは分配が間違っているからである。みんなで分かち合えば天国だ。奪い合えば地獄だ。

放牧は奇跡の農法 —牛を放牧すると生態系が変わって、牧草地で永遠に安定する—  
牛を野に放つだけで、牛が大地を踏みしめ、草を食み、ふん尿を大地に返す。山野の生態系がこの牛の行為のお陰で牧草地に変わる。放牧をしていると牧草地を耕して種を蒔きな

すという草地更新が必要なくなる。当然である。西洋では、放牧をして生き残った草のことを牧草と呼ぶのだから。

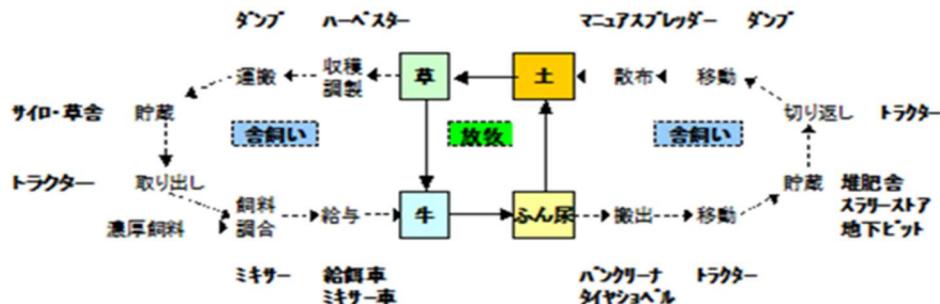


図5-1 酪農における循環と作業工程と主な機械施設

#### 奪い合いの農業 —濃厚飼料の多給—

規模拡大・1頭当たりの乳量追求をする酪農（この農法を放牧酪農に対して施設酪農と略する）は、外国から多くの穀物を輸入することで成り立っている。農業は無から富を生み出す唯一の産業だ。放牧酪農は農業だが、施設酪農は加工業である。

輸入穀物を大量に家畜に与えている日本の酪農は、世界に飢餓を引き起こしている・外国の水資源を枯渇させている・灌漑による農地の劣化・そして国内における糞尿公害である。

乳加工品に対する関税が下がれば、アメリカも穀物輸出ではなく、もっと儲かる乳製品に加工して日本へ輸出をするだろう。NZは麦・トウモロコシが栽培できる農地で放牧酪農をして、その生乳を加工することによって外貨を獲得している。麦・トウモロコシを輸出しても儲からない。

また、今は経済が豊かで、穀物を輸入しているが、日本が家畜のためにいつまでも穀物を買える保証はない。

#### 牛乳が足りなくならないの？ —日本には放牧適地が沢山ある・サラダビーフ—

穀物の輸入をやめたら日本の牛乳は足りなくならないのだろうか？私が就農した牧場も放牧をやめたために耕作放棄地が5分の1程度あった。萩原・フキ原に戻っていたが、放牧をすると2、3年ですっかり元の素晴らしい草地に戻った。耕作放棄地請負人と自分で呼んでいる。足寄では放牧をやめると傾斜地が耕作放棄地になる。離農地跡が利用されていない場合もある。こんな農地が北海道のあちこちにある。畳一枚の土地でも大切に放牧で利用する。それが日本の酪農家の常識になれば放牧地に事欠くことはない。

NZがそのよい例である。NZは土地の値段が北海道に比べてとても高いという理由がある。土地が安いと粗放的な利用になりやすい。NZではロードサイド グレージングと言

って、道端に電牧を張って放牧をしているのを見る。河川敷の放牧。鉄道脇の放牧。ゴルフ場・公園は羊の放牧で管理しているところもある。

酪農で利用できなくても、肉牛・羊を利用することによって、日本は反芻動物を放牧することによって、良質な蛋白資源が湧いて出てくる。

オランダに学ぶ ー酪農行政はどうあるべきか（グローバルジェネティックス株式会社足寄町勉強会より）環境の保護のために税金を使うー

われわれ酪農家の豊かな心になるのを待っていては、環境破壊が手遅れになってしまうので、行政は何をすればよいのか？オランダの酪農を例にとってみる。

2015年にEUのクォーター制が終了した。常識で考えると乳牛の増頭をして、生乳を増産しそうなものだが、2015年7月には新しいリン酸排出量宣言をした。クォーター制終了後からオランダの乳製品の輸出量が45%増加している。にもかかわらず、2015年7月から17年7月の頭数と比較して強制的に頭数を4%削減を決めた。淘汰1頭当たり約30万円の補償している。EUの環境法令はヘクタール当たりの排出量は窒素170キロ、リン酸250キロである。

オランダでは2020年までに放牧が強制的に義務化される。目的は1. 動物福祉。2. 乳質の向上。3. オーガニック酪農の推進である。

オランダではバイオガス発電は効率的でないとしてあまり施設がない。農地に糞尿が還る頭数にすれば、バイオガス発電をするよりも直接土壌に戻した方が効率が良い。

後継者問題 ーNZとモデルとスイスモデルー

「離農がもたらす問題は、日本酪農、農業の根本問題といえる。後継者不足と経営意欲喪失による離農が3分の2を占めている状況は、現在の北海道が抱える問題が単に経済的な問題ではなくなっていることを示している」『放牧酪農の展開を求めて』pp271 荒木

NZ式農場継承：それは農場主になることが魅力的であるために若者が努力の末に農場を獲得するシステムである。優秀なマネージャーは多額の報酬を得ることができるシェアミルクまたはイクイティー マネージャーなどのシステムがある。農場主と共同出資をして利益を分配する仕組みである。家族継承の場合でも、すべての子供たちに同額の相続をしなければならないので、家の農業を継いだ子供は兄弟に乳代から相続額を返済し続けて、返済をして始めた農場主になることができる。

NZの農場平均搾乳頭数は400頭である。365日放牧で畜舎はない。仕事は究極のアウトドアスポーツである。一人で200頭の牛を扱うのはかなりきつい(分娩シーズンが特に)。NZの酪農従事者のライフプランは50歳になったら、現場の仕事から足を洗って、経営のみの仕事に専念をすることである。

NZの平均農場資産額は4.2億円である。その農場主になれるのは酪農学科を卒業した人の40人に1人いるかないかである。それでも若者が農場主を目指す魅力がある。私の同

級生たちはこれが私の生き方だからと言っていた (way of life)。4億の牧場を取得するためには2億円のキャッシュがないと、市中銀行がお金を貸してくれない。優秀なマネージャーは貴重なので、優秀な人は牧場で働きながら2億円をためるのにそれほど年月がかからないそうだ。

スイス型農場継承：親子間継承（知人のフリッツの農場の見学のみからの私のお話です）。多額の投資によって、省力化を図り、後継者に魅力的な営農をすることによって、離農を防ぐシステム。

フリッツの牧場の家は木造で500年も持ちそうな立派な家屋である。そして驚いたのは、家屋とパーラー、乾草庫、納屋、フリーストールが同じ一つ建物であるのだ。乾草庫には風で収穫草を乾草にする乾燥施設がある。草の給餌は人が乗るクレーンが畜舎の中を移動してする。

高投資によって低労働力を達成している。スイスの酪農家の平均面積は26ha、搾乳頭数は25頭である。先進農家のフリッツのところで搾乳頭数は50頭、面積は30ha。この規模で親子2代が暮らして、親子2人で搾乳をしていた。

小規模な農家が沢山ある。家屋が立派であり、同じ造りをしていて農村集落に統一感があってそれが魅力になっている。フリッツは地元のコーラスグループに入っていて、突然歌い始める。

フリッツは酪農家11戸の共同出資で、グリュイエールチーズの工房を持っている。そのためにスイスの平均乳価よりも高く牛乳を売ることができる。チーズからできるホエーを利用するために共同出資の豚農場もある。チーズのための牛乳は、7000キロ/1頭/1年以下でなければならない（穀物をやりすぎでないことの証明）、体細胞、放牧の義務、サイレージではなく乾草の給与、などがある。

放牧期間道産飼料100% —北海道の水田・畑作農家の土作りを応援—

2018年5月に長沼町に北海道子実コーン組合の組合長の柳原さんを訪ねる。畑作の輪作にはトウモロコシが必須である。家畜用のコーンに補助金が出て、やっとトウモロコシが作れるようになった。トウモロコシの作付けは輪作の中で、土作りになくてはならない。トウモロコシが畑作農家を救い、北海道の畑作農家の希望の光であることを聞いて。応援をさせて頂くことにする。

別海町には遺伝子組み換えではない飼料に取り組んでいる酪農家もいるので、北海道の畑作農家と酪農家の連携が進んでいく。外国に頼らない農業への一歩が始まっている。

「自国の、小さな単位での資源の循環がこれからの世界の食と環境を守る要になっていきます。（庄司）」

おわりに —ゆたかなころ—

「牧場のありかたと、土・草・牛の思いとは一致していないのが一般的です。彼ら（土・

草・牛)の思い・生き方を尊重すれば、人もまた尊重されるものです。」マイペース酪農で有名な三友盛行氏の言葉です。

「少頭数による放牧・循環型の酪農です。農業は単なる経済的生産の道具ではなく、自然と人、人と人をつないで生命と文化を育む崇高な役割を担うものです。志の高い酪農家、農業者の活躍に期待します。(庄司)」

私たち酪農家に必要なのは、自然と同じだけの「ゆたかなところ」だ。その豊かな心で自然と向き合って農業をしたときに、どのような農業をするのかこれからが楽しみだ。自分の牧場は、自分の心の鏡なのであることを肝に命じたい。

ここに今日集まった私たちが豊かなところで自分自身・社会・自然・に向き合って幸せに生きられますように。

#### 参考文献

『世界を制覇するニュージーランド酪農 -日本酪農は国際競争に生き残れるか-』荒木和秋 デーリイマン社：生産システムのみではなく経営継承システム、普及システム、農民教育システムなど日本が学ぶべき点が書かれている。

『放牧酪農の展開を求めて -乳文化なき日本の酪農批判-』 柏 久 日本経済評論社

『放牧のすすめ』落合一彦 酪農総合研究所：農業は無から富を生み出す唯一の産業です。それが多額の補助金によって大規模化されて、加工酪農＝資源浪費型酪農になってしまふ。放牧酪農によって本来の農業である、無から資源を生み出す酪農にならない。

『草の牛乳』野原由香利 講談社：普通の酪農家が放牧をして立ち直ったお話。優秀な酪農家ではなく、普通の酪農家が放牧に転換をして成功する姿に、勇気をもらえます。

『牛乳の未来』野原由香利 農文協

『草地と日本人 -日本列島草原 1 万年の旅-』 須賀丈 築地書館

『はじめたくなる酪農の本 小さな牧場の大きな夢』株式会社アレフ TEL011-823-

8192

「よみがえる酪農のまち 足寄町放牧酪農物語」デーリイマン 2018年6月号より連載中 荒木和秋：足寄町放牧酪農研究会のドラマです。

「広報ほくれん No430」新農力発見の中に子実コーンについて、道産飼料100%の試みを取り上げられました。Web 上で見ることができます。